

論文内容の要旨

申請者氏名 村上勝典

論文題目：時間評価に関する心理学的研究—青年期における男女差の検討—

第1章 本研究の背景と目的

同じ10分であっても、スポーツをして過ごす10分と退屈な会議で過ごす10分とは、その時間の感じ方に違いがある。前者では10分が瞬く間に過ぎたと感じるのに対して、後者では10分がなかなか経過しないように感じる。このように、「心理的現在を超えた経過時間に対して、それを長い、短いと感ずること、あるいは常用時間単位と結びつけて、何分ぐらい経ったと思うこと、あるいは、ある持続時間と別な持続時間を比較して、どちらが長いと判断すること、これらの心的働きと行為を時間評価と呼ぶ」(松田, 2009)。この時間評価に影響を与える要因として、生物学的・生理的要因、認知的要因、パーソナリティ要因など多くの要因の関与が指摘されている。しかし、先行研究を概観した結果、各要因の効果の様相が整然と一貫して得られているわけではない。

時間評価に関して、生物学的・生理的要因を検討する目的で、男女差を検討した研究においても一貫した結果が得られていない。時間評価の性差の研究は、1900年代から欧米で行われてきたが、その結果は女性が男性よりも過大評価する傾向を示した研究(Axel, 1924; Gulliksen, 1925; McDougall, 1904; Myers, 1916; Yerkeys & Urban, 1906)、男性が女性よりも過大評価する傾向を示した研究(Harton, 1939)、それに、両性間に差が見られないことを示す研究(Gilliland & Humphreys, 1943; Swift & McGeoch, 1925)があり、1950年までの研究では、女性の方が過大評価(実際の時間の経過を緩慢に感ずる)すると結論付けた研究が多かった。その後も研究が多く行われたが、男女差が示された研究(Block, Hancock, & Zakay, 2000; Delay & Richardson, 1981; Espinosa-Fernandez, Miro, Cano, & Buela-Casal, 2003)がある一方で、男女差が示されなかった研究(Marmaras, Vassilakis, & Dounias, 1995; Roecklein, 1972)もあり、時間評価の性差に関する結果が曖昧であることが窺える。

これらの先行研究から、条件や測定法などを大まかにみれば、女性の方が過大評価(実際の時間の経過を緩慢に感ずる)を示すが、実験条件や対象者が異なるため、時間評価の性差研究の結果に整合性が得られているとは言えない。これは、時間評価の性差は実験条件や年齢に依存しているため、実験条件が異なれば、結果も変わり得ることを示唆している。したがって、評価方法や手続きなどの諸条件を組織的に変化させて、時間評価に対する性別の効果を条件発生的に検討し、条件に基づく結果を組織的に整理していくといった基礎的なデータ蓄積をしていく必要がある。

これまでの先行研究の多くは大学生を対象としている。青年期は身体的・生理的な男女差が明確になる時期であるため、生物学的・生理学的要因の検討には非常に適していると

考えられる。また、従来の所見は欧米人を対象としており、日本でもこれらの研究レビューはあるものの、日本人を対象とした研究は少ない。したがって、日本人を対象に時間評価の性差について実験的に明らかにすることは身近にいる日本人の時間意識の把握という点で意義があると思われる。

以上、時間評価の性差について、青年期の男女差は存在するのか。さらに、どのような条件の時に男性あるいは女性の過大評価を示すのかについて検討することは、既存の時間評価における男女差研究の非一貫性の説明に新たな扉を開くことになると考えられる。そこで、本研究では、青年期男女の時間評価の相違について検討することを目的とする。

第2章 時間評価の性差に関する実験的検討

第1節 時間評価に及ぼす性差の検討（研究Ⅰ）

研究Ⅰでは、青年期男女の時間評価の相違について検討することを目的とした。20名の対象者（男性10名、女性10名）は、実験者が計時をおこなう条件で、ランダムに配置された5つの課題時間（15秒、30秒、1分、3分、5分）に対して評価時間を産出した。これらの手続きを1回として、日を変えて、合計3回実施した。

分析には課題時間に対する比率を用いた。1回目から3回目の測定はそれぞれ別の日に実施しており、実験条件が異なるため、個別のデータとして扱った。性別（2）×課題時間（5）の2要因分散分析をおこなった結果、性別の主効果が見られ（ $F(1,58) = 6.10, p < .05$ ）、男性の方が長い評価時間を示した。すなわち、相対的には女性の方が時間の経過を緩慢に感じていることを示した。これは、空虚時間課題である点や測定方法に産出法を用いた点で先行研究とは異なるとはいえ、時間の流れの観点からは先行研究と同じ傾向であった。男性の方が長い時間評価を示したことは、4要因乗法モデル（松田，2009）に従うとすれば、神経生理学的な抑制を反映していると考えられた。

第2節 時間評価に及ぼす性差の再検討（研究Ⅱ）

研究Ⅰでは、実験者が計時を行ったため、実験者の期待効果が結果に影響した可能性は否定できない。そこで、研究Ⅱでは、被験者にストップウォッチで測定させる方法で青年期男女の時間評価の相違について検討することを目的とした。10名の対象者（男性5名、女性5名）は、ランダムに配置された5つの課題時間に対して評価時間を産出した。これらの手続きを1回として、日を変えて、合計3回実施した。

研究Ⅰと同様の分析をおこなった結果、性別と課題時間の主効果、交互作用は示されなかった。すなわち、研究Ⅰの結果と一致しなかった。これは、実験者期待効果、計時方法の違い、性格特性、被験者の数が影響していると考えられた。

第3節 研究Ⅰと研究Ⅱの結果の相違に関する検討（研究Ⅲ）

研究Ⅲでは、時間評価に性格特性、不安状態、Type A 類型に関わる因子、Big5 簡易版の性格特性、などの主体的条件の相違が如何に関与しているかについて吟味することを目的とした。研究Ⅰおよび研究Ⅱに参加した被験者に、矢田部ギルフォード性格検査（辻岡、

2000；以下，YG 性格検査），State-Trait Anxiety Inventory（水口・下仲・中里，1991；以下，STAI），KG 式日常生活質問紙 3 号（山崎・田中・宮田，1992），日本版 Ten Item Personality Inventory（小塩・阿部・カトローニ，2012）を実施した。

研究 I に参加した被験者の内的変数と，研究 II に参加した被験者のそれらを比較するため，また，両研究に参加した男女間の相違を検討するため， t 検定をおこなった。研究 II に参加した被験者の男女差を検討した結果，男性の方が YG 性格検査の「思考的外向」の標準点が低く ($t(8) = 2.36, p < .05$)，STAI の「状態不安」の得点が高かった ($t(8) = 3.77, p < .01$) が，研究 I ではこれらの変数に男女差は示されなかった。この結果から，思考的内向の過多と状態不安の程度が時間評価実験結果の相違に影響を及ぼしていることが示唆された。

第 4 節 被験者の内的特性を考慮した時間評価研究（研究 IV）

研究 III の結果から，思考的内向あるいは状態不安の偏りが見られない被験者を対象とすることで，男性の方が長い評価時間を示すと考えられた。そこで，研究 IV では被験者 24 名（男性 12 名，女性 12 名）を対象に，内的変数（思考的内向，状態不安）を統制し，研究 II と同様の手続きを用いて，青年期男女の時間評価の相違についての再検討をおこなうことを目的とした。まず，質問紙（「思考的外向」因子 10 項目と「状態不安」因子 20 項目）に回答を求めた。次に，研究 II と同様の手続きを用いて時間評価実験をおこなった。最後に，質問紙（「状態不安」因子 20 項目）への回答を求めた。これらの手続きを 1 回として，日を変えて，合計 3 回実施した。

YG 性格検査の「思考的外向」の標準点が 3 の被験者（被験者 24 名の計 72 回の測定において，男性 11 名，女性 17 名が該当），実験前と実験後ともに「状態不安」段階が 3 の被験者（被験者 24 名の計 144 回の測定において，男性 7 名，女性 16 名が該当），両変数ともに 3 の被験者（男性 3 名，女性 6 名）を対象に，研究 I および研究 II と同様の分析をおこなった結果，いずれも性別と課題時間の主効果，交互作用は示されなかった。すなわち，予想された結果は得られなかった。これは，計時方法の違いや日間変動が影響していると考えられた。

第 5 節 被験者の日間変動を考慮した時間評価研究（研究 V）

研究 V では，研究 I に参加した被験者の標準偏差（以下， SD ）と，研究 IV に参加した被験者のそれらを比較するため，また，両研究に参加した男女間の相違を検討することを目的とした。5 つの課題時間に対する 1 回目から 3 回目の評価時間の SD を算出した。

課題時間 1 分から 5 分の SD （研究 I：課題時間 3 つ×被験者 20 名分，研究 IV：課題時間 3 つ×被験者 24 名分）を用いて，研究 I と研究 IV における男女差を検討したところ，研究 IV において男性のバラつきが大きい傾向にあった ($t(55.13) = 1.96, p < .10$) が，研究 I では全く男女差が示されなかった。この結果から，長い課題時間では，男性の方が女性よりも日間変動の影響を受けることが示唆された。

第3章 総合考察

第1節 本研究の成果

被験者の思考的内向および状態不安の偏りや、評価時間のバラつきが小さい場合には、男性の過大評価が見出せる。しかし、常に男性の過大評価が生じるのではない。男女間でパーソナリティ特性の偏りが無い条件、しかも男性の評価時間のバラつきが大きい場合には、稀に女性の過大評価が顕われ易くなることもあった。従来、実験条件を組織的に変化させ、時間評価の性差に関する非一貫性について、パーソナリティ特性と日間変動の両側面から同時に検討した研究はなかった。本研究ではこれらの要因の影響により時間評価における男女の過大評価の様相が異なることを示し得た点に新奇性が存すると考える。

第2節 今後の課題

本研究では、計時方法によって実験結果が異なることが示されたが、この点については詳細な検討が必要である。また、対象者を青年期の男女に限定したため、対象者の年齢層を広げた検討が望まれる。さらに、空虚時間を用いたため、充実時間（作業をして過ごす時間など）を用いた検討が必要になる。

発表論文：

投稿論文（査読あり）

1. 村上勝典（2015） 時間評価の男女差の分析—青年期を対象として—。時間学研究, 8, 15-26.

投稿論文（査読なし）

1. 村上勝典・三宅俊治（2014） 時間評価における男女差。吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要, 11, 29-38.
2. 村上勝典・三宅俊治（2015） 時間評価における2つの異なる実験結果の吟味—性格特性および状態不安に焦点を当てて—。吉備国際大学心理・発達総合研究センター紀要, 1, 67-76.

学会発表

1. 村上勝典（2014） 青年期における時間評価の男女差について。時間学公開学術シンポジウム2014 プログラム・予稿集, 28.
2. 村上勝典（2014） 時間評価実験結果の相違に関する研究—パーソナリティ特性に着目して—。岡山心理学会第62回大会発表論文集, 47-48.

審査結果の要旨

時間知覚あるいは評価は、生物が環境に適応するための重要な要因の一つである。特に社会生活を営んでいる人間の場合、さまざまな状況における時間評価が大きな意味をもつ。

時間評価に影響を与える要因として、生物学的・生理的要因、認知的要因あるいはパーソナリティ要因などが考えられるが、その一つとして性差の要因がある。時間評価の男女差を検討した研究は、多くおこなわれているが、これまでのところ、一貫した結果は得られておらず、基礎的データの積み重ねによる理解が待たれるところである。

本研究は、こうした背景の中で時間評価の男女差について検討したものである。実験は大きく5つの部分からなっている。それらは、①実験参加者の時間評価を実験者が測定するもの、②実験参加者自身が時間評価をおこない測定するもの、③これらの条件間の比較、④参加者の内的特性を考慮した実験、そして⑤参加者の日間変動を考慮した実験である。

4名の審査者の意見として、時間評価という社会的にも重要な課題について、未だ明らかにされていない男女差に関する研究に高い評価が与えられた。また、従来の時間評価モデルに新しい概念を付加したことも評価された。

審査委員の評価は、5段階（A,B,C,D,E）評価で、B評価3名、C評価1名であり、面接口頭試問についても、全員「良」評価であった。

時間評価について、パーソナリティ特性と日間変動の両側面から同時に検討した研究は今までになく、本研究では、これらの要因の影響により時間評価における男女の過大評価の様相が異なることを示し得た点に新奇性が存すると考える。さらに、臨床心理学的な応用については、男女差を含めた時間評価における基準を明らかにすることが、さまざまな障害の査定につながるとの展望が示された。

以上のように、アプローチ法、論文の構成、研究方法の妥当性等を含めた観点から評価して、本学位審査委員会は一致して、本論文が博士（臨床心理学）の学位を授与するに値するものと評価した。